

岩波
講座

日本文学史 第三卷 古代

赤人と家持

五味智英

岩波書店

赤
人
と
家
持

五
味
智
英

目次

一 赤人	三
二 家持	八
参考文献	三

一 赤 人

1

赤人論に必ず登場する吉野從駕の歌を、私も手がかりとして、小論をはじめようと思う。

やすみしし わご大君の 高知らす 吉野の宮は たたなづく 青垣あおかきこも隠り 河波の 清き河内そ 春べは 花咲
きををり 秋されば 霧立ち渡る その山の いやますますに この河の 絶ゆることなく ももしきの 大宮

人は 常に通はむ (巻六・九二三)

み吉野の象山きやまの際きりの木末きりにはここだもさわく鳥の声かも (九二四)

ぬばたまの夜のふけゆけば久木生ふる清き河原に千鳥しば鳴く (九二五)

これは周知の通り、神亀二年(七二五)乙丑夏五月幸芳野離宮時笠朝臣金村作歌一首并短歌(九二〇—九二二)に次いで山部宿禰赤人作歌并短歌として載せてある二組の長歌反歌の、はじめの方の組である。後の方の組(九二六、九二七)の次に「右不審先後、但以便故載於此次」という左注があつて、正確なことはわからないけれども、神亀二年の作と認めることに支障はない(九六・三七の方は神亀元年三月行幸の時の作かも知れない)。

人 1 赤 人
これら長短歌三首についての問題点はいくつもあるが、要するに作者赤人が前代から何を受け、いかなる当代に在つて、何を創造し、後代に何を伝えたかというのが、文学史における問題であるわけである。前代からの継承の点については、人麿の從駕の作(巻一・三六—三九)の模倣が云々され、長歌における迫力のなさが非難の意味を以て指摘されるのが一般である。この指摘の正しさに関しては誰しも異論のないところであらう。しかし、それが何故そうなっ

たかについては、諸家の意見は必ずしも一致していない。たとえば高木市之助博士は、長歌における「やすみしわごほきみ」が人麿・赤人両者にことばとして共通しながら、人麿が壬申の乱と特別な関係のある吉野の地へ行幸している天皇をいっているのに対し、赤人が遊樂本位の楽しくさえあればどこでもかまわないという性質の行幸の一つとしての吉野行幸の主人公をいっているといううちがいがあり、それが赤人の長歌をして充足感に欠けたものたらしめたものであって、人麿の数々の表現にもたれなかったという事実こそは何よりも作者の「わごほきみ」に対する空虚観の表白であるとされ、風巻景次郎氏は、豊田八十代氏の吉野離宮丹生川上説の根拠を援用して、持統天皇の丹生川上神社信仰が吉野行幸の主動機で、風水の順調を神々に祈る神聖な神わざとしての女帝の行幸は、祭政一致的な雰囲気に支配されており、そこに人麿作歌が新室寿詞であり、大殿祭の祝詞であり、地鎮祭の祝詞でもあったゆえんがあり、一方赤人の作が吉野の山川の美をたたえることに専らで、新室寿詞としての性格が全くないのは、聖武朝の行幸が名勝の美を称し遊宴をたのしむことの方が主たる動機になってしまっていたからであり、そこに天皇と官僚群との精神的紐帯の変化、神信仰の微妙な、しかし的確な変化が見られるとされた。この両氏の見解は全面的に相違するものではなく、歌の作者と天皇との精神的な結びつきが、赤人においてゆるくなっているという点では一致しているが、丹生川上神社信仰を考慮に入れるか入れないかという点では相当な喰いちがいを見せている。風巻説は魅力的であるが、「何か神事に関係があったのではないか、ということも考えたが、それにしては、出遊の月が、年によってあまりにまちまちであるし、また六九八年から七〇〇年のブランクの解釈もつかない。だからそのようには、断定しかねる。」という北山茂夫氏のことばの通り（これは風巻説に関して述べられたものではない。北山氏が持統の吉野行幸の頻繁さの理由を考えられてのものである）、まだ疑点を存している。六九八年から七〇〇年（文武二―四年）までのブランクの方は、あるいは『続日本紀』の脱漏とみて救うことができるにしても（この辺、『続紀』の記事は多くない）、出遊の月が年によって区々であること、通覧すれば一月から十二月までの月も欠けていないことは、神事

関係とみるには大きな支障ではあるまいか。

こうして神事説がにわかに容認できないとすれば、持統・聖武兩代の吉野行幸の差は、やはり壬申の乱をクライマックスとする天武・持統ゆかりの地であり、皇嗣問題の一応の解決の舞台ともなった(天武紀八年)吉野と、然らざる吉野という相違に基づくものとするが穩当であろう。しかして、人麿と赤人との從駕の作のちがいが、環境論としては、行幸の性質の差と見ることができであろう。赤人は人麿と同じ地理的環境で、ちがった歴史的環境のもとに、天皇讃歌という同じ目的の歌を作ったのである。しかし、讃歌という儀礼歌の性質からして、先例のある表現をとることは当然なのであって、「ただの追隨、模倣というよりも、むしろ宮廷での儀礼の繼承という主要な関係からいえば、そうよりほかに宮廷詩人のゆき方がない」のである。赤人は九三の歌を作るにあたって、いかにして独創的なものを生み出すかに苦心したのではなく、偉大な先例たる人麿の作をどう用うべきかに腐心したに相違ない。その結果が九三のような形になって出て来たのである。そこには赤人による撰択があつたのであって、高木博士の計算による七十三%の句における人麿へのよりかかりも、決してただの盲従やつづり合せではないが、類句の多さは歴然たるものがあり、先に述べた一般の非難の起るのも当然だと思われる。

しかし、その非難は現在の人々の心に訴えない或いは訴えることが少いという意味で正しいのであって、この歌が職として負うところを果しているかどうかということは別の問題であるといつてよいのではなからうか。当時当処においては立派に役割を果し、ことによると新鮮味を以て迎えられたかも知れないのである。類句に満ちたこの歌に新鮮味などといひ出すと妙に聞えるかも知れないが、「たたなづく 青垣隠り 河波の 清き河内そ」はそれぞれ人麿の「たたなづく 青垣山」(三八)「山川の 清き河内と」(三六)と類句関係の指摘されているものであるけれども、人麿の青垣山は「山神の 奉る御調と 春べは 花かざし持ち……」につづくもので、花や黄葉をかざして御調として奉るものであるのに対して、赤人のは離宮がすっぽりと包まれている青垣であり、人麿の「山川の 清き河内と」

が「御心を 吉野の国の」につづくのに対して、赤人のは「河波の 清き河内ぞ」と断止して、河内の清さを印象づけている。そうして、「青垣隠り」は『万葉』においてはこの一例だけであり、河波を清しといったのもこれだけである。また「春べは 花咲きををり 秋されば 霧立ち渡る」は、人麿の「春べは 花かざし持ち 秋立てば 黄葉かざせり」(三八)と、はじめ三句において類句関係が指摘されているが、「霧立ち渡る」は赤人の方だけにある。類句とはいっても「花咲きををり」と「花かざし持ち」とでは、花の姿が随分ちがうし、総じてこの四句は両者とも概念的に構成されたものであるが、人麿の方がより観念的である。このように見て来ると、赤人の長歌の方が中央の八句において、自然を印象的にとらえているのであり、人麿のあちこちの句をただ補綴しただけのものでないことが知れよう。先例を追うという大筋を抑えた上で、こういう新し味を加えたこの歌は、おそらく当時讃歌として成功したものではあるまいか(五七)に、さつ矢手挟みさわぐ御狩人を、九三に、あわび玉を潜き出る野島の海人を、九六に、鮪を釣る舟や塩焼きを歌ったのも、人麿の御調を奉る山神や鵜川を立て小網をさし渡す川の神(三八)を念頭において新風を出したものであったかも知れない)。

反歌二首には長歌のうちにほのめいていた新風が顕然としてあらわれて来る。自然が全面をおおって来るのである。叙景歌の最高に位するものとして評価されるのはそのためである。ところで、この二首は島木赤彦によって天地・人生の寂寥相に入っていると評せられ、その批評は後々まで強い影響を及ぼしている。赤彦の評語が適当であるかどうかはしばらくおき、その「寂寥性」に関する論議一二にまず触れておきたい。高木博士は九三の長歌における「わごおほきみ」に対する空虚観による充たされなさ、さらに自分の社会にも充たされぬ充たされなさを抱いて、ただ一人象山の際に入り込んだり、夜ふけの河原に出たりして自然を求めるのが赤人の姿勢であるとし、そこに一本大きく歴史の基盤が通っているとされた(はやく土居光知氏にも似た説があるが、土居説では大君への空虚感でなく、人生の汚濁からの逃避が赤人をして自然に向わしめたとする)。博士は長歌における充足感の欠如に力点をおいておられ、赤

人の「寂寥」が何処から生まれたかを説いておられるのであって、「人間達にそむくがためにこそ自然におもむいた」赤人が反歌二首において充足感を得たか、なお寂寥を抱きつづけているのかについては述べておられないが、森脇一夫氏は赤人の作品全体を寂寥相がおおっているとし、その「寂しさ」は、赤人の活動力を低下せしめる理由もしくは身辺につきまとうていた危機感が生んだものであるとされた。氏はさらにその危機感を下級官僚の経済的みじめさや肉体的条件(腺病質)によって醸成されたものであらうと推測しておられるのである。⁽¹⁰⁾ここでは反歌二首は当然寂寥を漂わせているわけである。事実、森脇氏の論は赤彦の評言を手がかりにしてなされたものであった。

赤彦は、赤人の寂寥を生んだ根源を「沈潜した静肅な性格」「清澄純化の域」「明澄な心境と微細鋭敏な神経」⁽¹¹⁾に求めており、これらがいずれも静かに明るく澄んで張りにみちた心を示すことばであることを思うと、赤彦のいう寂寥は、うらぶれた孤独や活動力の低下ではなく、かえって生命力に満ちたものであり、孤というならば孤高に近いようなものだったと思われる。高木・森脇両氏は赤彦の評言を手がかりにして、赤人の解釈をされただけであって、赤彦の寂寥の意味を研究されたのではないから、両氏の論の妥当性を、赤彦の寂寥を基準にして計ろうとは思わないが、赤彦の意味したところは右の通りであったと思うのである。そこで赤彦の評の妥当性如何の問題であるが、はやく中村憲吉が赤人における滋味温情を指摘し、⁽¹²⁾五五の歌について「表面の景物を客観的に平叙しながら、内にはふかく作者の千鳥に対する愛着の情を通はし……」⁽¹³⁾といているのは、寂寥説に対する一つの補訂であった。静かに明るく澄んだ張りに満ちた心から生まれるものとして、「寂寥」は冷えさび過ぎ、高く幽遠にすぎるのはなかるうか。憲吉の滋味温情論はその冷えに暖か味を通わせ、赤人を修業得道の聖から人間界に連れもどした観がある。私もかつて、この反歌二首の「さわく」「しば鳴く」についてやや詳しい考察を行なって、赤人における顫動の美が、この歌をして清厳清肅ではなく清明清和なるものたらしめていること、顫動が、かき立てる騒がしさや繊細な感傷に墮し去らなかつたのは、聴覚的要素を澄みかえらしめ潜み入らしめる場として爽かに安定する視覚的要素の存在するためであること、

すなわち目にさやかな視覚の安らかな像が、細かく頼う聴覚の波を、柔かに湛えつつ静まる姿がこの歌の美であること、しかしてそれは赤人独特の美であることなどを述べたことがある。⁽¹³⁾これは赤人の創造であるといつてよいと思う（この点については議論もあるが、それについては後に触れることにする）。

2

かくて冒頭に掲げた一組の歌の、長歌は人麿の影響を著しく受けつつ新風をほめかし、反歌はそれを推し進めて新しい美を創造しているのである。ところで、反歌二首があまりにも顕著な存在であるためもあり、短歌の作者としての赤彦の批評が反歌を激賞し、それを機縁としてこの二首が有名になった事情もあって、反歌だけ切り放して論じられ鑑賞される傾向が強かったのであるが、実作の参考とか養いとかのためならば、それで差支えないけれども、事の真を得るためにはそれでは不十分である。赤人の動と静との問題に主眼をおいた前記論文（註13）では私も反歌だけを主として扱ったのであったが、文末に

斯る整いの幾階梯の最上に位するものの一として象山の際と清き河原の歌があること、それが行幸に供奉してのものであったことを指摘しておきたい。これについて「ひとまず自然の深い美に心打たれ、その美をわがものとする芳野の離宮、その離宮をしろしめす大君へと、心は次第に人間的なものに向い、遂に人麿と同じような天皇への讃仰の情に帰するのである。」（岡崎教授）と言われて居るのであるが、私は寧ろ順序を逆にしたいと思う。赤人の聖駕に扈從しての長りと歓喜、慎しみの中に激蕩と湛えるやわらぎ、この心情が清なる吉野の自然に接して生れたのがこれらの作であり、従つて単なる儀礼的作歌動機を想像するのがあやまりであると同時に、この所謂叙景的閑聯の基底に行幸の事実の先在を見逃してはならないのである。（もと旧仮名遣）

と付記したのも、また他の論文において、赤人の長歌の格調を論じて、最も典雅なものとして五三をあげ、かれが傾

挫も屈折もさまざまに試みたけれども、すぐれたものはやはりすなおに整ったものに在ったこと、かれの頓挫がほとんどすべて主観のあらわに顔を出す歌にあったこと、を指摘し、整った歌が行幸に關したものに多いことを述べたのも⁽¹⁴⁾、別の論文で、赤人の長歌反歌十三組について調べ、長歌反歌揃って格調正順なのは⁽¹⁵⁾三三—九五であり、赤人の「我」が最も敬虔に最も歎喜しつつ端坐し得るのはほかならぬ行幸の日であったと記したのも、長歌反歌の不可分性と、この吉野徙駕の作の讃歌性とを思つてのことであつた。

近年土橋寛・青木生子・尾崎暢殊・稻村栄一の諸氏によって讃歌性が論じられているのは然るべきことだと思ふ。もともと諸氏の意見は同じではなく、土橋氏は⁽¹⁶⁾三三の長歌については「人麿の長歌で述べた発想法を受け継いでいるが、人麿ほどに讃美の詞章が力強くはなく、ほんの型だけで歌っている。とくに注意されるのは、人麿が山の花や黄葉を天皇に『奉る御調』と歌ったあの現神思想がここには認められないことで、自然は純然たる自然の美である」とし、⁽¹⁷⁾三五・九五については

今や自然は天皇から独立し、それによって叙景歌が寿歌から独立し、反歌は長歌から独立する。赤人は長歌の讃歌よりも、そういう叙景歌において心をうち込んで歌っているのである。

とし、また⁽¹⁸⁾五四について「讃歌的叙景歌」であるといつておられる。青木氏は

赤人の心よせたものは、彼一個の好みに投じた自然でなく、又その美感でもなくして、天皇や山嶽の神性に対して古代人が感じていた民族的讃歌の心である。これは根本において、私的な個性的な文学感動でなく、公的な没個性的な頌歌の性格を帯びたものに外ならない。ここに、赤人はこの面に偉大な才能を発揮した人麿の流れを汲む民族詩人たることを認めねばならない。……赤人の自然歌は、原始の民謡的歌謡から次第に発展を遂げて来た讃歌における叙景要素の正統な継承であり、その最後の帰着点にたつていたのである。⁽¹⁹⁾（もと旧仮名遣）

とされ、尾崎氏は折口博士の学統を承け、発想史的な角度から見て、赤人の歌がなお呪的発想を根底としつつ、文学

の境地に接近してくる過程を、序詞・類句・類語の觀察を通して考え、赤人は発想・用語に独自のものがほとんどなく、すべて先行の作品や同時代のものから学んだとされた。¹⁸ 稻村氏は、赤人の従駕歌の反歌には他の赤人作品とは異質の叙景性があり、それは純粹に自然そのものを求めて自己の寂寥を満たそうとして成ったというよりも、従駕の歌であるといふことの精神の緊張を裏付けとして始めて得られたものであり、したがってこれら叙景歌の根底には「わごおほきみ」がまだ捨象されていず、そこによまれた自然は「わごおほきみ」の反措定として赤人の空虚を埋めるものではなく、まだ「わごおほきみ」の延長線上にあったのであり、叙景歌もそれ自身を目的として形成されたのではなく、多かれ少かれ結果的な所産であつたとされる(稻村氏のは赤人の「叙景歌」を論じたものであるが、讃歌性に及んでゐるのである)。

以上のように、同じく讃歌性を説いてもそれぞれ所説を異にしており、当面の問題の^{九四}・^{九五}の讃歌性に関して、個人性の問題に関しても一致する所がない。赤人の没個性といふことにおいては青木・尾崎両氏は一致するようであるが、他の両氏においてどの程度に考えられているかは必ずしも明瞭ではないように思われる。

ところで、青木氏は、人麿の讃歌中に存する自然讃美の精神を、赤人はかれの生きた歴史時代の中で、ごく自然な赤人なりの感覚で継承したとされ、尾崎氏は、「久しきにわたる歌史の展開の結果として徐々に培われてきた原因が、赤人という人を得て、それも古代の歌を文学に近づけるのに有力な条件となつた儀礼の場と旅情にはぐくまれて、たまたまこのような表現を得しめたにすぎない」とされた。この赤人なりの感覚、赤人という人を得てという両氏のことは注意されていふと思う。両氏ともに赤人の個性を高く見ることに不賛成なのであるが、近代人のような個性を持たなかつたといふ意味ならば、私も賛成である。しかし、赤人なりに、赤人という人があつて、長い歌の歴史の上に何等かの新しさを生み出したとすれば、それは赤人の個性的な仕事であり、創造であるといつて差支えないであらう。その意味において、赤人がいかに先行の歌の歴史に負うていようと、同時代の雰囲気の中に包まれていようと、

やはりこの反歌二首において、一つの創造を果していると、私は思う。立つ波がしらは、もとの水がいかに青くとも、やはり白いいわなければならぬのである。青木氏が反歌二首について「いかにも赤人らしい詩的個性のかがやきを認めないわけにはゆかない」と記されたのは、白いものを白いいわれたものだと思う。

3

讃歌が伝統的なものであるだけに、創造の問題とからみあって来るので一言した次第であるが、一体この讃歌はどういう歴史的基盤を持ち、どういう事情のもとによまれたのであろうか。この点についての高木博士の見解は先に記した通りであり、風巻氏の説も紹介したが、同氏の説にはなおあげておかなければならない点がある。氏によれば、「赤人派^{シヤレ}(赤人と金村と千年)の人々は、地方の旧族で新時代を背負う意識はなく、保守的で、全国民の多くと大差ない郷土人としての生活につながり、天皇や上級貴族の栄華を別世界のものと見て、何となく旧時代のままに生きていた。表面的な政治的動きに意識的につながる必然性がなくただ官僚組織中の小さな歯車の一つとして受動的に御用をつとめ、激流の一部に生じた淀みのように、急湍の近くにありながら、かれらの意識は淀み、表面の動きから離れる。そうした意識の状況から、赤人の自然観照歌とも言うべき作は生まれて来た。かれらの旧さが、そして現世における存在の無用さが、かれらの歌を形成させる」(採意)のである。かくて氏は、^{ハニ}の歌は新時代の流れに淀むところから生まれ、はじめから渦の外に捨てられた詩であるとし、赤人の自然観照は全民衆のそのころの生活に限りもなくつづいており、その何とない静かさは家持のようにに悵情というにはもっと無邪気で、しかし無意識なさびさにいろいろどう天皇と官僚群との精神的紐帯の変化」ということばを引いて、それが宮廷讃歌の衰弱、ないし個人的な叙景歌への変質の根本原因であるとし、人麿が期待した天皇国家は完成されたが、天皇支配力の巨大さが宮廷官僚に脱落感を与

え、それが行幸への関心の変化を生じ、その変化が、宮廷讃歌から個人的な叙景歌を育ててゆく基盤となったとされた。

諸氏のいわれる通り人麿における持統天皇と赤人における聖武天皇とは、意味がちがっていたであろう。その点についてはおそらく誰も異議をさしはさむことはないと思われる。しかし、それがこの讃歌の制作にどう響いているかということになると事はそう簡単ではない。反歌だけを切り放さず、長歌と一体のものとしてみる立場においても、長歌と反歌との関係を断絶的または疎隔的に見るか、あるいは連続的にみるか、すなわち反歌の讃歌性を極めて稀薄なものとするか濃厚なものとするかについて、意見の相違の存することは前々に引いた諸説からもうかがわれるであろう。諸説の間に存する大小の相違について解析するのも興味のあることであるが、今は省略して、端的に私見を述べることにする。

人麿の感動とはちがっていたにしても、赤人は吉野に従駕して感激していた。この晴の日の感激は、かれが下級官僚であり「政治的な動きに意識的につながる」ことがないことによって減殺される性質のものではなかった。かえって下級官僚として政治的なあれこれに干与しないことが、その感激を純粹にした点もあったであろう（このことは人麿についてもいえると思う）。現在私たちが持統の代と聖武の代とを比較するような意識は、かれにはない。ただ、いにしえの盛んなる代に、聖なる天皇のみゆきに供奉して、人麿がああ歌どもを奉ったこと、今自分がやはり聖なる天皇の駕に従ってここににいるという意識だけがある。当時当処における赤人には、「現世における存在の無用さ」も「宮廷官僚の脱落感」もなく、ただ晴がましい感激があった。それがこの讃歌の基底をなすものである。晴がましいといっても、それは遊樂の開放的気分ではない。聖武天皇の行幸は持統天皇のそれとちがって遊樂的なものであるとは、しばしばいわれるところであるが、たといそうであっても、下級官僚赤人にとっては、従駕は謹肅した晴がましさを与えてくれるものであったにちがいない。かれの位置は、そうした気分をおこすには、天皇との距離が近すぎず遠す

ぎず、最も適當なものであった。この謹肅した晴がましさが、この讃歌の端正な格調を生み、端正のうちに、さざなみのように極めて目立たない歓喜をただよわせたのである。前掲の論文(註14・15)にも詳説したように、赤人の作品は形の上でも内容的にもかなり屈折や頓挫を見せる場合があるが、この長短歌では少しもそういうところが見出せない。それは赤人のこの時の謹肅した心情のあり方によるものである。

反歌における自然は、だから、人間の汚濁からの逃避でも、大君への失望の代償でもなく、無意識なさびしさにいろどられているのではなく、無意識な晴がましさに満されているのである。晴がましさというべくあまりにも感情があらわれず、静かすぎるという人があるかも知れない。しかし、この場合にそういうあらわれ方をするのが、赤人らしさであることもまた、かつて説いたところであるから(註13)、ここには詳説しないが、「赤人派」と呼ばれる金村や千年の吉野従駕の歌が自然をとり上げているとか、人麿的迫力がないとかいうことだけで同一視しないで、赤人の作品そのものが、他の二人といかにちがった形象を有しているかに注目すべきであろう。それが——無意識的で公的世界に融和している(青木氏)としても——赤人らしさなのである。稲村氏は赤人の叙景歌を「従駕の歌である」ということの精神の緊張を裏付けとして始めて得られた」といわれたが、これは私とほぼ同意見である(稲村氏の論全体について私が同意見だというのはない)。

こういえば、赤人の従駕の作全体は今とりあげている歌とは同じではないではないかという反問が起きるであろう。いかにもその通りである。私が先の引用文に「幾階梯」といっているのはそのためである。その幾階梯の頂上が吉野の作であるのは、私には、意味のあることに思われる。いにしえのよき時代に神ながら神さびますめらみことのしはしばいでしたところという感激が、ここ吉野においてこそ赤人の胸を満たしたことが容易に推測できるからである。それに山中のしじま、山の大気は、海の打開けた景とちがった寂靜の感を以て人を包むものでもある。

こういえば、同じ吉野の作六六・九七の組は如何という反問が提出されるであろう。私は、これを讃歌としては敗北

であるとの説を知らないではないが、そして^{九三・九五}より下ったものだとは認めるが、やはりすぐれた作と考える。この場合も反歌の方が緊った格調を有している。ところで人々があまりとり上げないけれども、赤人にはまだ^{二〇五・二〇六}の吉野での応詔歌があり、これは失敗作である。従駕の作であり、しかも吉野での作なのに失敗作であることは、上に度々述べて来た私の論旨にとってまことに不利な例であるように見える。が、これは神亀の二組とは制作の事情がちがうので、そのための失敗であると思う。

第一に、集中同一人が同所において三組の讃歌を作った例は赤人だけであり、二組というのも人麿があるだけで、しかも赤人の神亀年度にならんでいる二組はちがった年のものである蓋然性があって、もしそうだったとすると、赤人の讃歌は年を異にして三度作られたことになり、天平八年の作は三度目のものであるから、作者にとっては甚だ作りにくいことだったろうと思われる。第二に、神亀二年と天平八年(七三六)とでは十一年の開きがあるし、赤人の年代の明らかな作は天平八年の^{二〇五・二〇六}を以て最後とするので、このころかれの作歌力が衰えていたかと考えられる。かれの年代判明の歌が神亀元年から三年までに集中的にあらわれ、とんで天平五年と推定される長歌と反歌とが一首ずつ(三七二・三七三)と、独立の短歌が一首(三七八)、天平六年の短歌が一首(二〇二、難波行幸の時の作だが長歌はない)あるだけで、そのあととは今の問題の一組である。年代不明のものが相当あるので、たしかなことはいえないが、天平八年ごろの衰えを推測してもよいのではなからうか。(なお、ついでにしておくが、赤人は天平八年の後半または天平九年に没したのかも知れない。周知の通り、天平九年紀には春から疫瘡が大流行し、公卿百姓の死ぬ者は数え切れないほどだとある。これは九州からはじまったのであるが、九州での流行は天平七年からはじまっており——天平七年紀の終には天下豌豆瘡をわずらい天死する者多しとある——、天平九年には大倭伊豆若狭伊賀駿河長門の民が疫飢によって賑給されているのをみると、春から大流行したにしても、前年後半には大和でもこれにかかるものが相当いたろうと考えられる。赤人の歌が天平八年六月を最後とするとすれば、この流行で没したかと思われるのであ

る。第三に、神龜初年は聖武即位直後で世の中も比較的穏かであったが、天平に入ってから、元年の長屋王の変はいかに下級官僚の赤人であっても衝撃だったろうし、翌年の行基らによる庶民の集会、三年の天皇の耳に入るほどの獄囚の悲吟叫呼の声、四年五年と引きつづく飢疫、六年の大地震とそれにおびえて「災異説」によるしばしば発せられる詔やさまざまな処置、そうして七年の凶年と疫瘡というように、浚みにある下級官僚の皮膚にも否応なしに迫ってくる性質の事がらがあいついで起っている。だから天皇を仰がなくなったなどというのではないが、こういう事が赤人のような人の作歌力に打撃を与えることは十分考えられる。

上に述べた三つの条件を考え合わせると、赤人は天平八年の吉野従駕の歌は、神龜の作に対して変化をつけなければという意識のもとに、萎えた力をふるい起して作ったのであらうと思われる。こういうことでは誰しも好い歌はできないが、特に赤人のように、ひそまった心から滴り出るように端正な調べを生む人にとっては、こうした無理は致命的である。こう見て来ると、所は吉野、場合は従駕であっても、この歌を神龜年度のものと並列して論じるのは無理なことがわかるであらう。

4

さて私は先に高木・風巻両氏の説を引用しつつ、持統行幸と聖武行幸は質がちがい、人麿と赤人とは場所と目的を同じくし、歴史的環境を異にして作歌したといった。そして三三—九三の作は、謹肅した晴がましさを以て歌われたといった。そこに矛盾はないのか、つまり大君に対する気持は人麿の時代とちがっているはずなのに（この点については川崎庸之氏も「大王の命かしこみ」という句を手がかりにして論じておられる²⁰）、謹肅した晴がましさを持し得たのかということが問題にならう。風巻氏は赤人派を保守的だと言われたが、憶良だの『懷風藻』の詩人たちだのに比較すればたしかにそうであらう。一方また、これも風巻氏が度々説かれるように赤人の住んだ時代は開化時代である。

赤人は開化時代に金村や千年とともに孤島の如く取り残された存在で、それ故にあのような讃歌を作ったのであろうか。赤人は当代の中に住み、微官とはいえ朝廷に仕えていた。山沢に亡命したり市井の大隠だったりしたわけではない。はやく大宝元年（七〇二）、文物の儀是に於て備われりと『統紀』に記され、律令の撰定、平城遷都、貨幣の鑄造と画期的な事件があいつぎ、和銅四年（七一二）には衛士がことごとく弱くて物の役に立たぬという状態に立至っており、壬申以来の草創の氣が失せて、制度の整頓と文雅の風とが見出される。赤人の盛に作歌した神龜初年は、大宝元年から二十余年を経ており、神龜三年（七二六）九月には内裏に玉来が生じたというので、文人一百十二人をして詩賦をたてまつらしめ、その等級によって絁・綿・布を賜わるといふ大がかりなことが行なわれている。朝廷における文雅の氣が察せられよう。しかして神龜元年に聖武即位とともに左大臣となつたのは、皇親政治復活の先頭に立ち、また漢詩の方では一期を画した長屋王であつた。こういう雰囲氣は、たとい漢詩をつくつたりする學問はせずとも、また朝政のことには何のかかわりはなくとも、微官赤人の上に空氣のごとく漂つて来ないはずはない。そうして天皇は二代の中つぎ天皇を経て、長い待望の後に即位をみた聖武天皇であり、その即位直後である。微官にとつて、それが藤原氏のねらいであつたかどうかなどは意識に上りはしなかつたであらう。そして現人神の天皇がシナ風の聖天子の像にかわらうと、從駕は晴がましいつつましいものであつたにちがいない。果してそういう變移を赤人自身主体的につかんでいたかは疑問であるが、同時に、ただに伝統的なものに埋没しているのみであつたとするのもあやまりであらう。空氣はやはり呼吸していたのである。このことは明治以後の日本人の様相を考え合わせてみればわかるであらう。「赤人が無自覺に生きていた歴史的地盤」「古代的な連りをもつた公共精神」といふ青木氏のことばは、右のような意味に解することができるならば、私も賛成である。赤人のこういう心情が、謹肅しつつ、晴の日に吉野の自然にふれた時、生まれたのがこの讃歌だったのである。